

# 近代社会における人間疎外と大衆性についての実証的研究\*

## The Empirical Study on Dehumanization and Spiritual Vulgarity of the Masses in Modern Society\*

渡邊望\*\*・羽鳥剛史\*\*\*・藤井聡\*\*\*\*・竹村和久\*\*\*\*\*

By Nozomu WATANABE\*\*・Tsuyoshi HATORI\*\*\*・Satoshi FUJII \*\*\*\*・Kazuhisa TAKEMURA \*\*\*\*\*

### 1. 研究の背景と目的

明治維新に端を発し、我々の生活に多大な影響を及ぼした我が国の“近代化”は、大きく産業化と民主化からなるものであると言われている<sup>1)</sup>。ただし、そうした近代化は、人々の生活環境だけを変えるというよりも、それと同時に、人々の態度や行動そのものが、近代社会に協和する形で変化しつつあるという可能性が考えられるところである。

この様に、近代社会と協和するように行動する人間のタイプを「近代人」と呼べば、そうした近代人が、近代化の進展と相俟って出現するとともに、近代社会の動態を生み出しているものと考えられる。しかし、近代化が、我が国の著しい経済発展や政治的平等を実現する原動力となった一方で、そうした経済的發展や社会的平等の過度なばかりの追及がもたらした弊害が様々な社会問題の形をとって顕在化しつつあるように思われる。土木分野においても、例えば、経済性や効率性を過度に追求する中で、地域の景観や街並みが破壊されつつあることが指摘されている<sup>2)</sup>。

それでは、そうした近代化をもたらした歴史的契機とはどのようなものであったのであろうか。前述の通り、近代化が様々な社会的弊害をもたらししているとするなら、そうした問題を解消する方途を探る上で、近代化の契機となった原因を検討することが重要であると考えられる。この問題について、ヘーゲルは、近代社会が形成された歴史的契機として、産業革命を起点として生じた「人間疎外」の問題を提起している。ここで、人間疎外とは、ヘーゲルの著書「精神現象学」の中で論じている概念であり、本来、共同体と一体であるべき人間の精神（意識）が共同体から離れてしまう現象を表している。本研究では、ヘーゲルの哲学的論考を基に、ヘーゲルの論ずる人間疎外と近代人との関連性について実証的に検討することを目的とする。

\*キーワード：人間疎外、大衆性、近代社会

\*\*学生員、東京工業大学大学院理工学研究科

(東京都目黒区大岡山2-12-1, TEL:03-5734-2577,

E-mail:n.watanabe@plan.cv.titech.ac.jp)

\*\*\*正員、工博、東京工業大学大学院理工学研究科

\*\*\*\*正員、工博、京都大学大学院工学研究科

\*\*\*\*\*非会員、博(学術)、早稲田大学文学学術院心理学専修

### 2. 大衆性と人間疎外

#### (1) 大衆性とその社会的影響についての既往研究

近代化の弊害については、これまでも多くの論者によって検討されてきた。その中でも、スペインの哲学者オルテガは、近代社会において大衆なる人間のタイプが出現し、様々な社会的弊害の本質的原因となっていることを、その著書「大衆の反逆」<sup>3)</sup>の中で批判的に論じている。

オルテガの大衆論の特徴は、大衆を数量的な概念あるいは政治的・社会的階級として捉えるのではなく、万人に共通する「心理的事実」として捉えようとしたところにある。オルテガによれば、「大衆」とは、自分自身に何も課さず、現状に満足しきった「平均人」であり、この意味において「選ばれた者」とは区別される。

この認識の下、先行研究<sup>4)</sup>では、以上のオルテガの定義する心理的事実としての大衆概念に着目し、オルテガの「大衆の反逆」における大衆の心理的描写に基づいて、個人の大衆性を表す質問項目を作成し、大衆性についての心理尺度を構成している。そして、この先行研究の結果、大衆性が「傲慢性」と「自己閉塞性」から構成されることが示されている。ここで、傲慢性とは「ものの道理や背後関係はさておき、とにかく自分自身には様々な能力が携わっており、自分の望み通りに物事が進むであろうと盲信する傾向」を表し、自己閉塞性とは「自分自身の外部環境からの閉塞性」を表している。さらに幼少期の家庭内のコミュニケーションや地域コミュニティとの関わりが、大衆性の一側面である自己閉塞性の形成要因の1つである可能性が示されている<sup>5)</sup>。

そして、個人の大衆性が社会に及ぼす影響について、先行研究<sup>6) 7)</sup>において、景観問題と公共事業を巡る合意形成問題に、個人の大衆性が否定的な影響を及ぼす傾向が示されている。ただし、既に論じたように、個人の大衆性は、万人に共通する普遍的な人間の心理的類型であり、それ故、個人の様々な判断や行動に影響を及ぼすものと考えられる。この点を踏まえれば、人々の大衆化は、これらの特定の問題のみでなく、近代社会の至る所で様々な問題を引き起こしている可能性が考えられるところである。

## (2) ヘーゲル「精神現象学」<sup>8)</sup>と「人間疎外」の概念

ヘーゲルは、その著書「精神現象学」の中で、「人間疎外」の概念について論じている。本書は、個人の精神の成長過程を辿ることによって、人間精神が歴史的に形成されてきたその精神史を論じているものと指摘されている<sup>9)</sup>。本書において、ヘーゲルは「疎外」なる概念を、近代社会における人間精神の発展にとって不可欠な過程として位置づけている。ヘーゲルによれば、「疎外」とは「共同体が意識の外へ押し出された」状態、すなわち、自己と共同体が一体化しておらず遊離している状態を表している。そして、人間精神は、この疎外を通じて、自己を共同体から外化し、自分自身を疎遠化することによって、「家族」や「国家」等の様々な共同体の存在を認識するものと考えられている。その上で、人間精神は、共同体と再び一体化することにより、これらの共同体との関わりを深めていくものと想定されている。

しかし、外化された人間精神が再び共同体と一体化せず、どの共同体にも吸着されない可能性が考えられ、ヘーゲルの理論によれば、この場合、人間精神は「個」として共同体から遊離したままとなり、人間精神の成長は停滞することとなる。本研究では、人間精神がそうした疎外されたままの状態に陥っていることを特に「人間疎外」と呼ぶこととする。

### 3. 理論仮説

オルテガの大衆性についての先行研究<sup>4)</sup>より、オルテガの論ずる大衆性が、「傲慢性」と「自己閉塞性」から構成されることが示されている。前述の通り、「自己閉塞性」とは「自分自身の外部環境からの閉塞性」を表しているが、そうした大衆人は、いかなる共同体からも乖離した状態、すなわちヘーゲルの言うところの「人間疎外」に陥っている可能性が考えられる。この点に関連して、オルテガ自身も「[大衆人は]自己の中に閉じこもり、外部の力によって自己の外に出ることを強制されない限り永遠の逼塞を申し渡されている」と述べているが、そうした大衆人の精神状態は、共同体から疎外された「個」としての状態に他ならないものと考えられる。

さらに、先行研究<sup>5)</sup>において、オルテガの論ずる大衆性の形成要因として、幼少期の生活環境の影響について検討されているが、その結果、幼少期における家庭内のコミュニケーション不足や、地域との連帯の希薄さが、個人の自己閉塞性を増進する傾向にあることが示されている。これらはヘーゲルの論ずる「家族」や「地域」という共同体からの疎外によってもたらされ得るものであると考えられる。それ故、以上の先行研究もまた、ヘーゲルの論ずる人間疎外に陥っている存在とオルテガの言うところの大衆人とが、同一の精神状態にある可能性を暗示しているものと考えられる。

さらに、先行研究<sup>10)</sup>では、自己閉塞性が高い人において、時間を経るにつれ、傲慢性が形成されていく可能性が示唆されているが、このことから、大衆性を形成する根源的な要因は自己閉塞性であり、先に述べたように、自己閉塞性が、家庭や地域コミュニティから遊離することでもたらされていることを考え合わせると、家庭や地域コミュニティから遊離することが、オルテガが指摘する大衆化をもたらしていると言えるだろう。

以上の議論に基づいて、本研究では以下の仮説を仮説1として措定する。

#### 仮説1

ヘーゲルの論ずる「人間疎外」の状態にある存在こそが、オルテガの論ずる大衆人である。

前述した通り、ヘーゲルは近代社会が「人間疎外」を契機として形成されていることを論じているが、以上の仮説が真であるとするならば、それと同時に、そうした近代社会の形成と相俟って、大衆人が出現し、近代人に特有の種々の態度や行動を形成しているという可能性が考えられるところである。これより、個人の「大衆性」と近代人の態度や行動との関連性について、以下の仮説を仮説2として措定することが出来る。

#### 仮説2

オルテガの論ずる「大衆性」が、「近代人」に特有の態度や行動を形成している。

なお、本研究では、近代人に特有の態度や行動を表す「近代人尺度」として、「消費行動」、「近代的権威への追従・前近代的権威の軽視の度合い」、「絶対的価値に対する信念」、「権威主義の度合い」、「後悔・追求傾向」、「福祉政策への賛否」、「政府・環境問題への意識」、「主観的幸福感」を取り上げ、以上の仮説について検証することとした。

### 4. 実験概要

#### (1) 実験参加者

本研究では、上記の目的のもと、Web アンケートによる調査を実施した。被験者は男女共に200人で平均年齢は52.08歳、年齢標準偏差は18.94歳であった。

表1 人間疎外尺度の質問項目

「人間疎外(家族)」	信頼性係数( $\alpha$ )=0.72
・ 自分と自分の家族とは一心同体だという感じがする。*	
・ 家族とは、家族の中の一人一人の人間関係の集合にしかすぎないと思う。*	
・ 自分は自分の家族というものをとても身近なものとして自然に感じる。*	
・ 結婚した人はその新しい家族に自らをなじませるのが当たり前だと思う。*	
・ もしも自分一人の利益と家族全体の利益が対立したら、どちらを優先しますか。*	
「人間疎外(地域)」	信頼性係数( $\alpha$ )=0.78
「人間疎外(組織)」	信頼性係数( $\alpha$ )=0.75
「人間疎外(国家)」	信頼性係数( $\alpha$ )=0.78

\*逆転項目

表2 近代人尺度の各項目の説明

尺度	概要
消費尺度	優越感 (α=0.91) ガジェット (α=0.80)
権威尺度	近代的権威 (α=0.76) 前近代的権威 (α=0.88)
絶対的価値尺度 (α=0.66)	
アドルノF尺度 (α=0.83)	
後悔・追及尺度	後悔 (α=0.69) 追及 (α=0.87)
福祉政策への賛否 (α=0.78)	
環境配慮的態度 (α=0.87)	
政府への支持 (α=0.69)	
主観的幸福観 (α=0.78)	

※αは信頼性係数を表す

(2) 調査項目

本調査では、a) 人間疎外に関する項目、b) 大衆性に関する項目、c) 近代人特有の態度や行動に関する項目 (近代人尺度) を測定した。

a) 人間疎外に関する項目

人間疎外に関する心理尺度を構成するため、「家族」、「地域」、「組織」、「国家」という4つの共同体を想定し、「精神現象学」の中から「人間疎外」について記述されている箇所を抜き出すこととした。その結果、「一心同体感」「無機質的つながり」「身近な共同体意識」「自己断念」「共同体への奉仕」の5つの概念に関する記述が抜き出された。そして、その記述を基に、それぞれの概念について、4つの共同体を対象とした質問項目を作成した (表1)。表1の質問項目は「家族」についてのみ記載しているが、「地域」、「組織」、「国家」についても同様の質問項目を作成した。回答は7件法で要請し、それぞれの共同体についての質問項目の加算平均を尺度化した。

b) 大衆性に関する項目

大衆性に関する項目として、前述した先行研究<sup>4)</sup>で提案された大衆性尺度を用い、2因子 (傲慢性、自己閉塞性) 19項目の質問項目を設定し、7件法で回答を要請した。各尺度の信頼性係数は、傲慢性について0.68、自己閉塞性について0.67であった。

c) 近代人特有の態度や行動に関する項目 (近代人尺

度)

近代人尺度として、表2の尺度を作成し、用いた。各質問項目はそれぞれ7件法で回答を要請し、加算平均を尺度として用いた。

5. 結果と考察

仮説1の検証を行うために、まず、人間疎外尺度と大衆性尺度の間で相関分析を行った (表3)。表3より、すべての共同体についての、人間疎外尺度と、大衆性尺度を構成する自己閉塞性との間に有意な負の相関が確認された。また、家族からのについての人間疎外尺度と傲慢性との間にも有意な負の相関が確認された。次に、本研究で想定した4つの共同体 (家族・地域・組織・国家) のどれにも属しておらず、それ故、人間疎外されていると考えられる人 (以下“未所属群”と呼称する) と、少なくともどれか1つの共同体に属していると考えられる人 (以下“所属群”と呼称する) の大衆性を比較した (表4)。表4より、未所属群は、所属群より有意に自己閉塞性が高い傾向が示された。

さて、大衆人なるものが、傲慢性と自己閉塞性を併せ持つ存在であることは、先行研究<sup>4)</sup>においても、そして本研究の分析結果でも両尺度が有意な正の相関 (r=0.114) を示していることから裏付けられている。その点を踏まえれば、自己閉塞性においてデータによる支持を受けたという本研究の2つの分析結果は、大衆性

に関する仮説についてもデータの支持を受けたと解釈す

表3 人間疎外尺度と大衆性尺度の相関分析結果

	傲慢性		自己閉塞性	
	r	p	R	p
人間疎外(家族)	.182	.000 **	.334	.000 **
人間疎外(地域)	-.003	.950	.345	.000 **
人間疎外(組織)	.087	.081	.361	.000 **
人間疎外(国家)	-.002	.963	.285	.000 **

r:相関係数 p:有意確率  
\*\*:.1%水準で有意(両側)

表4 共同体に所属群と共同体に未所属群との大衆性得点の比較

		N	M	SD	t 値	p
傲慢性	共同体に未所属	57	3.370	0.569	1.454	.147
	共同体に所属	343	3.238	0.645		
自己閉塞性	共同体に未所属	57	3.837	0.764	5.168	0.00
	共同体に所属	343	3.302	0.717		

表5 大衆性と近代人尺度の相関分析結果

	消費尺度				権威尺度			
	優越感		ガジェット		近代的権威		前近代的権威	
	r	p	r	p	r	p	r	p
傲慢性	.225	.000	-.077	.126	.206	.000	-.118	.018
自己閉塞性	-.057	.257	-.013	.790	-.055	.270	-.454	.000

  

	絶対的価値		アドルフ尺度		後悔・追及傾向			
	r	p	r	p	追及		後悔	
	r	p	r	p	r	p	r	p
傲慢性	-.225	.000	.346	.000	.104	.037	.104	.037
自己閉塞性	-.314	.000	-.266	.000	-.194	.000	.007	.889

  

	福祉政策		環境配慮的態度		政府への支持		主観的幸福感	
	r	p	r	p	r	p	r	p
傲慢性	-.183	.000	-.321	.000	-.053	.289	-.124	.013
自己閉塞性	-.228	.000	-.327	.000	-.169	.001	-.208	.000

r:相関係数 p:有意確率

ことができ、それ故、仮説1「ヘーゲルの論ずる「人間疎外」の状態にある存在こそが、オルテガの論ずる大衆人である」を支持する結果が得られたものと考えられる。

また、仮説2の検証を行うために、大衆性尺度と近代人尺度の間で相関分析を行った(表5)。表5より、近代人尺度の形成に、大衆性尺度を構成する傲慢性と自己閉塞性の少なくとも一方が影響を及ぼしている可能性が示された。それ故、少なくとも本研究で用いた近代人尺度については、「オルテガの論ずる「大衆性」が、「近代人」に特有の態度や行動を形成している」という仮説2を支持するものと解釈することができる。

## 6. 結論

以上の結果を要約すると、「ヘーゲルの論ずる「人間疎外」に陥っている存在こそが、オルテガの論ずる大衆人であり、そうした人々は、社会的に好ましくないと考えられる近代人特有の種々の態度や行動を形成してい

る」という可能性が、本研究の結果から示唆されていると考えられる。このことは同時に、近代社会に協和する形で、大衆人が台頭し、様々な社会的弊害をもたらすこととなった根本的な原因にヘーゲルの論ずる「人間疎外」があったことを示唆するものと考えられる。以上の可能性が真であるとするならば、ヘーゲルの論ずる「人間疎外」を克服することが、近代社会の弊害の抑止につながるものと考えられる。

ヘーゲルは、そうした人間疎外を防ぐための方途として、社会の中での他者との付き合い方、所謂、社交する力を身につけることを表わす「教養」<sup>9)</sup>の重要性を指摘している。他者と付き合い、適切な社交を行うという極めて常識的な行動を身につけることが、人間疎外を抑止し、引いては、近代の弊害を克服する糸口になるものと考えられる。逆に言えば、そうした常識的な行動が成し得なくなりつつある昨今の状況にあって、近代の弊害と言う極めて異常な事態が深刻の度を増しつつあるということも出来るように思われる。今後は、そうした「教養」を適切に身につける方途について、例えば都市計画やまちづくりの文脈も加味しつつ、検討を行っていくことが重要であると考えられる。

## 参考文献

- 1) 西部 邁:大衆の病理—袋小路にたちすむ戦後日本—, NHK ブックス, 1987.
- 2) 三浦 展:下流社会 新たな階層の出現, 光文社新書, 2005
- 3) ホセ・オルテガ・イ・ガセット:大衆の反逆(1930), (神吉敬三 訳), ちくま学芸文庫, 1995.
- 4) 羽鳥 剛史・小松 佳弘・藤井 聡:大衆性尺度の構成についての研究—Ortega “大衆の反逆”に基づく大衆の心的構造分析—, 心理学研究, 79(5), pp.423-431, 2008.
- 5) 藤井 聡ほか:オルテガ「大衆の反逆」論についての実証的研究, 日本社会心理学会第48回大会論文集, pp.120-121, 2007.
- 6) 羽鳥 剛史・小松 佳弘・藤井 聡:政府に対する大衆の反逆—公共事業合意形成に及ぼす大衆性の否定的影響についての実証的研究—, 土木計画学研究・論文集, 25(1), pp.37-48, 2008.
- 7) 小松 佳弘・羽鳥 剛史・藤井 聡:大衆による風景破壊:オルテガ「大衆の反逆」の景観問題への示唆, 投稿中.
- 8) ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル:精神現象学(1807), (長谷川宏 訳), 作品社, 1998.
- 9) 竹田 青嗣・西 研:完全読解ヘーゲル「精神現象学」, 講談社・選書・メチエ, 2007.
- 10) 小松 佳弘:個人の大衆性と弁証法的議論の失敗に関する実証的研究, 東京工業大学土木工学専攻平成20年度修士論文, 2009.
- 11) ジャン・ボードリヤール:消費社会の神話と構造(1970), (今村仁司, 塚原史訳), 紀伊国屋書店, 1995.
- 12) Adorno, T. W. et al: The authoritarian personality. New York: Harper and Row. pp. 228, 1950.
- 13) 西山 俊彦:カリフォルニア権威主義尺度の包括的検討, サピエンチア, 15, pp.1-25, 1981.
- 14) Schwartz, B. et al: Maximizing versus satisficing: Happiness is a matter of choice. Journal of Personality and Social Psychology, 83, pp.1178-1197, 2002.
- 15) 磯部 綾美ほか:意思決定における後悔・追求者尺度の開発—Schwartz 尺度の日本版—, 心理学研究, 79(5), pp.453-458, 2008.
- 16) 藤井 聡・Garling, T.・Jacobsson, C.:ロードプライシングの社会的受容と環境意識—社会的ジレンマにおける心理的方略の可能性—, 土木計画学研究・論文集, 18(4), pp.773-778, 2001.
- 17) 羽鳥 剛史・藤井 聡・水野 絵夢:土木の趣旨についての簡易メッセージが土木事業の賛否意識に及ぼす効果の分析, 土木学会論文集D, 64(2), pp.279-284, 2008.
- 18) Lyubomirsky, S., Lepper, Heidi S.:A measure of subjective happiness: Preliminary reliability and construct validation. Social Indicators Research, ABI/INFORM Global, pp.137, 1999.

